

研究発表 I (A会場)

他教科を関連付けた

教科等横断的な教科指導の推進

発表者

教科研究センター 小中学校教科研究課 天方基史 品野由香里 平山由佳

発表要旨

新学習指導要領においては、教育課程全体を通じて、教育目標の実現に向けて教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指したりしていくことが重視されている。

今年度は、福井県学力調査で「防災」をテーマとした調査問題を作成し、その分析を通して教科等横断的な教科指導の県内の現状を把握した。その結果を見ると、各教科でのねらいはおおむね達成していたが、肝心の防災意識の高まりまでは言い切れなかった。

そこで、各教科のねらいを達成し、防災意識が高まるような「防災」をテーマとした単元構想例を提案した。

- 1 小学校第5学年で、理科と社会科と保健体育科を関連付けた『水害～福井豪雨の記録から～』の単元構想例を提案。



- 2 中学校第2学年で、理科と社会科と家庭科と保健体育科を関連付けた『地震～東日本大震災の余震が10年後に～』の単元構想例を提案。

来年度は、引き続き「防災」をテーマとして単元構想例を基に実践を行い、その教育効果を検証していくとともに、「伝統や文化」「郷土や地域」「環境」「食」についても同様に実践・検証していく予定である。

参加者の感想

○身近な話題やタイムリーな話題で、いかに自分ごとにして考えたいと児童・生徒に思わせるかが大事だと改めて思いました。

○各教科の関連づけを明確にすることで、総合の取組みが深いものになったと感じました。学習して分かった、一歩踏み込んだ問題点に児童・生徒が気づき、考える機会が必要だと感じました。

研究発表 I (B 会場)

タブレット端末の活用に向けた

学校現場への支援

発表者

タブレット端末活用プロジェクトチーム 飯田吉則

発表要旨

GIGAスクール構想によるタブレット端末整備スケジュールが前倒しになり、学校現場における端末活用の支援が喫緊の課題となった。この課題に対応するため、本研究所では部署の垣根を越えたプロジェクトチームを組織した。プロジェクトチームでは主に市町対象の研修の実施、県立学校への支援、オンライン学習会およびタブレット端末活用通信の発行による普及活動を行った。加えて、県立学校においては、嶺北、嶺南の2つの高校で公開授業を実施した。

各種研修ではオンライン授業の実施方法、クラウドサービスおよび学習支援アプリケーションの活用法、共同編集機能の授業での活用法などについて扱った。また、県立学校対象のオンライン学習会では、所員の講義だけではなく、実際にタブレット端末を活用している教員による実践の共有なども行った。

今後、各学校への1人1台端末整備が完了すると、授業でも本格的に端末が活用されることになる。そのため、今後は、幅広い世代の教員のタブレット端末活用スキルを向上させることが大きな課題となる。そこで、悉皆研修等も活用しながら、各学校でのOJTの取組みを支援する研修を行わなければならない。



参加者の感想

○1人1台のタブレット導入の先端的な実践事例として参考となりました。報告の中にもありましたが、タブレットを授業に導入することが目的ではなく、タブレットを授業に導入し、児童・生徒の学びを充実させることが目的であることを忘れてはいけないと改めて感じました。

○これからの学びの広がりを感じられる構成で、ワクワク感が持てました。

○来年度に向けてしなければならないこと、考えなければならないことのヒントを得ることができました。

研究発表Ⅱ（A会場）

小学校における並行読書の効果

～並行読書を取り入れた授業の提案～

発表者

教科研究センター 小中学校教科研究課 笹山さやか 斉藤昌代

発表要旨

福井県の小中学生の読書の現状を見ると、自主的に読書を楽しむ習慣が身に付いているとは言えない。そこで、国語科の授業を通して、進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を育てる手立ての一つとして、「並行読書」の効果を検証した。

令和2年度福井県学力調査（SASA2020）の結果を分析したところ、並行読書の実施率が高い小学校は国語の正答率も高いことが明らかになった。並行読書の具体的な取組みを調査し、その内容をもとに、効果的に並行読書を取り入れられるような授業づくりを目指した指導案を作成し、2校で実践した。なお、指導案は以下の3点を取り入れた内容とした。

- ・教科書教材と同時に並行読書教材を読み進める。
- ・児童に付けたい力、並行読書教材を読む目的を明確にする。
- ・図書館司書に並行読書教材の選書を依頼する。



2校の実践から、児童の読書量が増え、読書の幅が広がったことや、教科書教材での学びを活用しようとする意識が高まっていたことがうかがえた。並行読書の活動を授業に取り入れることは、児童の読書活動の充実と単元のねらいの実現に十分な効果があると考えられる。

参加者の感想

○実践例がわかりやすく、やってみたいと思う内容でした。

○ただ「本を読め！」と言っても児童はやらされ感満載だと思うので、児童が意欲的に取り組めるような手立てや学習課題を考えていくことの大事さに改めて気付きました。

研究発表Ⅱ（B会場）

福井県版ポジティブ教育の実践

～小中一貫校開校に向けての学校支援～

発表者

教育相談センター 教育相談課 有田留美子 仲野聡美

発表要旨

教育相談センターでは、学校支援、教師支援を目的として、平成30年度から「持続可能な幸福を育む学校づくり」を実現するために地域全体で取り組むプログラムの作成を行い、学校や地域の実態に応じて「福井県版ポジティブ教育プログラム」の実践を推進している。

ここでは、本研究所が3年間の研究として取り組んでいる、小中一貫校開校予定の地域での実践について取り上げた。令和3年度に小・中学校が統合するに当たり、本プログラムが共通する学校づくりの手立てとなると考え、実践研究を進めており、支援内容は次のとおりである。

- ・推進体制の機能の充実
- ・各校の実情を踏まえた研修の実施
- ・教員によるピア・サポート活動、レジリエンス教育の授業における実践支援

2年目となる今年度は、校区全体で目指す子ども像を見据え、各校の教員が足並みを揃えて取り組めるよう支援したことで、推進体制の素地を作ることができた。また、研修を継続したことで、教員の理解が深まり、実態に応じた実践につながって、目指す子ども像の具現化に向けた一定の成果を上げることができた。来年度は、小・中学校が施設一体型として開校し、義務教育9年間を見通した実践が可能となる。小中一貫校の強みや地域の特色を生かした実践につなげていけるよう、より効果的な支援を行っていく。



参加者の感想

○実践協力校として聞かせていただきました。本当にいい勉強になっていますし、子どもにも職員にも良い変化が見られています。

○子どもたちに必要な「生きる力」の一つとして、大切な取組みだと思いました。この取組みはぜひ広めていってほしいです。

○子供たちの人間力を育成することは、学校教育の中で最も大切なことだと考えます。予測困難な社会を生き抜く中で、9年間かけて人間力を高めていく実践事例として、発信していただきたいと思います。

ミニ発表（A会場①）

マネジメント研修のまとめ

発表者

福井県立藤島高等学校 教諭 渡邊本樹

大野市有終南小学校 教諭 田中恵理



発表要旨

○渡邊教諭 「想像力を有した未来社会のリーダーを育成するための

カリキュラムマネジメントと教員コミュニティの醸成」

中堅教員を中心に質の高い授業づくりの追究が常に行われ、主体的に取り組み、他の教員と協働する姿勢が身につけている教員集団であるが、新型コロナウイルス感染症による教育環境の激変の中、教員も生徒もどのように「藤島らしさ」を醸成するかが課題である。

今年度は毎日の授業時間を45分×7時間としたことで、部活動終了も18時となり、生徒にも教員にも35分（短縮5分×7時間分）を返すことが可能になった。その時間を、生徒は主体的に学習する時間とし、教員は自主研究に取り組む時間とすることができた。

また、学校設定教科「研究」を軸としたカリキュラム・マネジメントにも取り組み、藤島型記述式ルーブリックを作成した。3年間の学びを見通した系統性のある評価軸としてのルーブリックとなるように工夫した。加えて、様々な授業や活動をHP、新聞等で紹介し、情報発信の強化にも取り組んでいる。

○田中教諭 「三気で生き抜くチーム南」

休校期間中に、本校のミッションについて教職員全員でじっくり考え、「元気」「勇氣」「根気」の三つの「気」を合い言葉に、児童の活動の見直しに取り組んだ。

業務の効率化を一番に考えた。教員が授業や活動の準備、省察に当てる時間を生み出すため、使いにくい時間を校時から徹底的に削除し、下校時刻を20分早めた。児童が登校し集団で学ぶことの意義を考えたり、学校でしかできないことは何かを話し合ったりするなど、職員間の連携を密にし、全職員で全校児童を見ることを心がけた。個人としては、教職員が互いに高め合うためにリーダーシップを取ることができるよう、管理職と連携した。

カリキュラム・マネジメントとしては、コロナ禍というピンチをチャンスに変えるべく、前例改善ということを意識してきた。学校行事や校外学習など、児童の学校生活の潤いとなるものはなるべく実施したいという管理職の思いを受け、目的を明確にしながら実施した。

参加者の感想

○教員同士が、同じ目標に向かうために、目指す姿を具体的にイメージできること、そしてそのイメージをお互いに共有できる組織であることが大事だと思いました。

○職員室に良好な関係が構築されていると、学級の状態も良いと学んだことがあります。きっと教員がチームになっていると、どこかのクラスで何かが起こっても、そのピンチをチャンスに変えていく力があるのだろうと思いました。

三二発表（A会場②）

若手教員自主研究サークルと経済同友会 との交流会（若大海）活動報告

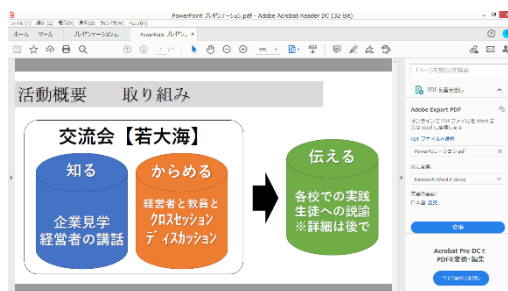
発表者

福井県立藤島高等学校 教諭 鈴木聡史 中川和也

発表要旨

若手教員自主サークルと福井経済同友会との交流会（通称、若大海）は、実社会で活躍できる人材育成に貢献することを目的として、平成30年度より活動を開始した。次年度より実施形態が変更になるため、3年間の活動を振り返るとともに、学校現場における実践について発表を行った。

藤島高校ではキャリア教育に漠然とした問題意識を抱えていたところ、経済界との交流の誘いがあり、それを契機として様々な活動に参加し、学校現場での実践に生かした。若大海の会合では企業経営者の講義を聞くだけではなく、現役社員とのクロスセッションなどを通して経済界の熱い思いを受け取った。



実践として、企業経営者との関係を生かして先端企業講演会を開催した。生徒は、企業の持つ技術的・社会的な課題発見の視点を学び、多角的な視点から問題を発見し、構造を捉える力を身に付けることができた。さらに、探究活動の活性化にもつながった。

活動概要 まとめ

人間教育は共通課題
→相互乗り入れ型 の実践

各校のミッションに合わせた
「開かれたキャリア教育」構想

【「研修化」に際しての要望】
→仕組まれる ことと 望む こと

2年間の活動を通して、学校における生徒への指導も、企業における社員教育も、人間教育という点では共通であると実感した。

だからこそ、学校と経済界をはじめとする外部との相互乗り入れ型の実践が今後も必要であると考えている。

参加者の感想

○企業の方と教員がつながり、そのつながりを生徒とのつながりに発展させることは参考になりました。講演会だけでなく、生徒たちの発表の場にも協力を得ており、機会あるごとに関わってもらうことが大切であると改めて感じました。

○交流が、生徒・教員・企業それぞれにメリットを生み出していることと、その関係作りを継続することの大切さが伝わりました。

ミニ発表（B会場①）

新たな教員研修のデザイン

コロナ禍で見えてきたこと

発表者

教職研修センター 教員研修課 富田雅人

発表要旨

教職研修センターでは、個々の教員がキャリア形成の展望を持った主体的な研修となるよう、福井県教員育成指標をもとにした質の高い研修を目指すとともに、教員が児童・生徒と向き合う時間をつくるために研修の精選・効率化を図りながら、教員研修をデザインしている。

今年度は、業務改善の観点から集合型、遠隔型、訪問型、通信型の四つの研修形態の組み合わせによるハイブリッド型研修を取り入れるなど、少しずつオンラインを活用して研修の精選・効率化を進めていく計画であった。

しかし、コロナ禍による集合型研修の中止により研修の再設計を迫られたことで、オンライン化を一気に進めることとなった。これは新しい研修の在り方を探るよい機会となった。

受講者の声から、ファシリテーターの力量向上や研修内容の吟味など、運営面での課題も見えてきた。

オンライン化により見えてきたその効果と課題から、再認識された四つの研修形態それぞれの特性と、ハイブリッド型の有用性について検証し、新たな教員研修のデザインについて考えた。



参加者の感想

○今年は本当に大変だったと思います。メリットとデメリットを精査していくとともに、より良い研修のあり方を考えていくことが大切だと思いました。

○私も今年はこのような状況だったからこそその学びや発見がありました。

○オンラインによる研修が多くなった今年であるが、良かった部分は継続し、新しい方法にも取り組んでいって欲しい。

ミニ発表（B会場②）

SASA2020の結果報告と

効果的活用について

発表者

教科研究センター 小中学校教科研究課 西畑千登世 近藤伸彦 吉田恵梨

発表要旨

「今年度の県学力調査（SASA）の概要」「基礎力問題の結果と分析」「特徴的な調査問題」「生活や学習、学級に関する調査（質問紙）の活用」の4点について発表した。

SASAは毎年度実施されており、児童生徒の学習状況および学習と生活に関する意識や実態を把握し、結果分析により課題を明確にし、課題の克服や支援の充実に役立てることを目的としている。

今年度の県学力調査は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休業などの影響を把握することに意義があると考え、調査問題では基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているかどうかをみる基礎力問題を中心に出題し、結果分析や授業提案について、全県に向けたオンライン研修を実施した。

基礎力問題の結果と分析については、小学校国語科と中学校国語科の「主語と述語の関係を捉える問題」、小学校算数科の「割り算の性質を使って割る数の小数を整数に直す問題」など、課題があると考えられる調査問題を取り上げた。

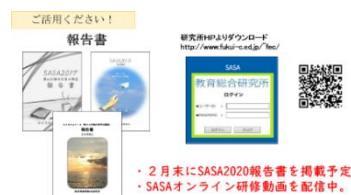
特徴的な調査問題については、「教科等横断的な視点」で作成した「防災」をテーマとした問題や、「ふるさと教育の視点」で作成した「中池見湿地」や「福井県の伝統的な行事や祭り」を取り上げた問題を紹介した。

生活や学習、学級に関する調査（質問紙）の活用については、「学級の状態を読み取る」「教育相談に生かす」「自身を見つめ直す」「授業改善に生かす」という四つの活用方法や、質問紙を学校アンケートとして活用した事例などを紹介した。

参加者の感想

OSASA2020の結果報告と効果的活用について、これまで自分の教科のことに集中してきましたが、全体的な内容についてよく分かりました。

○高校の教員ですが、質問紙は生徒理解や生徒自身の自己理解に活用できると感じました。勉強になりました。



ミニ発表（B会場③）

県外派遣教員として学んだ

福井県の教育の魅力

発表者

教科研究センター 小中学校教科研究課 大野 聖木

発表要旨

福井県の教育には「協働」がある。もしなかったら、いい取り組みは共有されず広がりにくい。その点、福井県の教員の中には「協働」があるため高い水準の教育を足並み揃えて行うことができているのだろう、という県外派遣教員として見た福井県の教育の魅力を説明した。



一方で、県外から見た違和感もある。それは教員のきめ細かな指導である。きめ細かであることで、教員と児童・生徒の縦のつながりは強固になるが、児童・生徒同士の横のつながりや、主体性を削いでしまうことになっていないか。また他県に比べ教科指導は熱心であるが、特別活動の中の学級会の比重が軽いと感じる。

る県外派遣教員もいる。そこで学級会を軸にした、「児童・生徒同士の協働意識」が高まる授業づくりを提案した。児童・生徒の主体性や協働の高まりに向けて、福井県の教員の協働とともにある徹底した指導が行われると、更なる教育効果が得られるのではないかと考える。

参加者の感想

○福井県内にいると気付かなかった「協働」の大切さについて学ぶことができました。また、「特別活動」を子どもたちの主体的な活動の場として生かすことの大切さもよく理解できました。

○初めの数字からの入りが素敵でした。福井県の教育の魅力とともに提案もいただき、ありがとうございました。私は初任の頃から当番活動と区別した係活動を、学級の中での大切な活動として毎年行っており、一般的なのかと思っていました。実際に行っているのはどのくらいの割合なのかと興味がわきました。コロナ禍で大変な中、福井に来てくださってどうもありがとうございました。